（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	放課後デイサービスヤシノキ（児童発達支援）			
○保護者評価実施期間	2025年　12月1日	～	2026年2月10日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	6	（回答者数）	3
○従業者評価実施期間	2025年　12月1日	～	2026年2月10日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	8	（回答者数）	8
○事業者向け自己評価表作成日	2026年　2月20日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	個別支援の丁寧さ。ひとりひとりの発達段階・特性に合わせた支援計画を作成し、小さな成長も見逃さずに記録・共有している。	視覚的支援の活用。ホワイトボードにプログラム実施内容を詳しく書いたり、提示している。	専門的知識の強化。発達特性・感覚統合・行動分析などの外部研修への参加を促したい。
2	安心できる人的環境。職員間で、情報交換を徹底し、子どもが安心して関われる関係づくりを重視している。	環境構造化を明確にしている。活動スペース、食事スペースなど、刺激を減らす工夫をしている。	評価ツールを導入し、成長の見える化をねらう。チェックリストを作成し、発達評価表を作成するなどをして、療育にもっていく。
3	実体験を通した療育。制作・感覚遊び・SSTなど体験型プログラムを取り入れ、楽しみながら学べる環境を整えている。	連絡帳のアプリへの移行、指導員が新しいことを知るための研修を行っている。家族様と面談を通して共有を丁寧に行っている。	保育園・幼稚園への情報共有を強化し、そして小学校など移行支援も行っていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	支援内容の成果や成長の過程について、保護者に対して十分に“見える化”できていない部分がある。日々の支援は丁寧に行っているが、療育の意図や積み重ねの効果が伝わりにくい場合がある。	職員の経験値や専門性に差があり、支援の質にばらつきが生じる可能性がある。さらに、建物構造上の制約もあり、完全なバリアフリー環境ではない点も課題である。	職員間で支援方針の共有を徹底し、研修やケース会議を通じて専門性の底上げを図る。また、建物構造上の制約については、人的配置や安全対策を強化し、事故予防を最優先にした運営体制を整えていく。
2	一軒家構造のため段差や階段があり、完全なバリアフリー環境ではないことから、日常的に安全面への継続的な配慮と見守り体制の強化が必要である。	当事業所は一軒家構造であり、玄関や室内に段差が存在し、階段を使用する必要があるなど、完全なバリアフリー環境ではない。建物の構造上、大規模な改修が難しく、物理的な面での制約がある。	物理的な制約を補うため、人的配置による見守り体制を強化し、階段使用時や移動時には必ず職員が付き添う体制を徹底する。また、段差部分には視認性を高める表示や滑り止め対策を施し、事故予防に努める。
3	家族同士が交流できる機会が十分に確保できておらず、保護者間で情報や悩みを共有する場が限られているため、横のつながりを深める機会づくりが課題となっている。	保護者の就労や家庭事情により来所時間が限られ、送迎時の短時間対応が中心となっているため、家族同士が交流できる場を定期的に設ける仕組みが十分に整っていない。	保護者参加型の小規模イベントや交流会を定期的に企画し、オンライン面談や情報共有ツールも活用しながら、無理なく参加できる交流の機会を増やしていく。